

キーツの湿った植物のイメージ

星 野 信 夫

I

A bush of May flowers with the bees about them;
Ah, sure no tasteful nook would be without them;
And let a lush laburnum oversweep them,
And let long grass grow round the roots to keep them
Moist, cool and green; and shade the violets,
That they may bind the moss in leafy nets.

(*I Stood Tip-toe upon a Little Hill* 29-34)

上述の詩をみると、詩人キーツが自然の織りなす自然界の中にかくれている虫類や植物などのかすかな動き、色彩や音などに鋭敏な観察眼をはたらかしている様子がよくわかる。特に露をふくんだあらゆる植物などの感覚的印象は実に繊細で、しかも控えめに描写されている。

「サイキに寄せるうた」(‘Ode to Psyche’)では暗闇の中のサイキとキューピッドの愛が「燃える(たいまつ)」(‘A bright torch’) (66)の輝かしい明るみの中に暖かい愛の神を誘い入れられるのだが、この二人の愛の陶醉と驚きを、みずみずしく描写している。「沈黙して冷たく根を張り、芯から芳香ただよう青と咲き白銀色と咲く草花や、蕾が紫の草花などに囲まれて」(‘Mid hush’d, cool-rooted flowers, fragrant-eyed, / Blue, silver-white, and budded Tyrian,’) (13-14) いる中であって、二人は「草の臥床」(‘the bedded grass’) (15)の上に横になっているのだ。二人の足もとには小川がひっそりと流れて、大地を潤し、草花を美しく露じめらせるのである。芯から馥郁たる香りがただよう、青と咲き、白銀色と、紫の蕾の花々の中、この狂おしいほどまでに自然の美に包まれるとき感動を覚えない者がいるであろうか。このように神話的エピソードを美しい自然のイメージの中にとり入れることにより、はげしい陶醉

感をともなう二人の愛をキーツは想像力を織りまぜつつ創造したのである。このように自らの詩の源となる爽やかな感動をもたらしてくれる露を帯びた、芳香ただよう草花の印象に加えて、キーツをさらに強く魅了したのは露にぬれ美しく気品をただよわせる苔なのである。キーツが苔という用語を好んだことは、キーツの用語索引によると、moss④、moss'd①、mossed②、mosses②、mossie①、mossiness②、moss-lain①、mossy②もあることから明らかである。

事実、キーツの作品に描かれている苔のイメージに接するごとに彼の一贯した同様な情調を感じさせられる。そして、それが彼の詩の中で繰り返し用いられているのを見ると、苔のイメージというものに託されたいくつかの象徴を考えさせられる。彼の描く露にぬれた植物の世界に頻出する苔に焦点をあてて考察をすすめていく。

II

「長い間都会に閉じこめられて」（‘To One Who Has Been Long in City Pent’）のソネットに描かれているように

To one who has been long in city pent,
'Tis very sweet to look into the fair
And open face of heaven, —to breathe a prayer
Full in the smile of the blue firmament.
Who is more happy, when, with heart's content,
Fatigued he sinks into some pleasant lair
Of wavy grass, and reads a debonair
And gentle tale of Love and languishment?
.....

(1-8)

息づまるような都会の生活からひろびろとした自然に開放されたキーツの感動的なよろこびと、のびのびとした気分とが、この上もない純粋な叙情の調べでかなでられている。疲れても心は満ちたりて「風に波うつ緑の草原」（‘wavy grass’）の上に思い切り手足を伸ばして、恋とその悩みのやさしく優雅な物語を読むことのできる幸せを詩人は十分感じるのであった。このようにキーツの

詩的感覚はいつもさめた目で自然界のものを眺めた。このソネットに見られるように、彼の詩的想像の糧ともなっていた「風に波うつ緑の草原」のような感覚的イメージは初期のキーツにとっては自然の中に身近に存在していた。

次に挙げる *Endymion* にも同じような自然と喜びとヴィジョンが実に重要な意味を持つのである。地下漂泊中のエンディミオンが死のような孤独感を味わっているとき「また感觸し、伏しなびかすような涼しい草原もない、また爽やかな静かな大気も味わうこともない」(‘…nor felt, nor prest/Cool grass, nor tasted the fresh slumberous air;’) (II, 289-290) と彼は自分の悲痛な運命を嘆く。再びエンディミオンが月の女神の空靈な姿を見たとき「おゝ、私はなんと花の臥床がのぞましいことかを思っして下さい！」(‘O think how I should love a bed of flowers!’) (II, 330) と月の女神に訴える。

更につづいて、*Endymion* の詩に、あの見なれた美しい草花から遠くに離れた海底にいるときさえエンディミオンは「漂泊の歩みをとめ、半ば恍惚として彼の頭を乱れはびこる藻草の房の上にのせて」(‘…he stay’d/His wandering steps, and half-entranced laid/His head upon a tuft of straggling weeds,’) (III, 107-109) 彼は優しい月の女神を味わうのである。

「サイキに寄せるうた」(‘Ode to Psyche’) にも詩心を呼びおこすような、キーツの甘美な言葉が展開される。

I wander'd in a forest thoughtlessly,
 And, on the sudden, fainting with surprise,
 Saw two fair creatures, couched side by side
 In deepest grass, beneath the whisp'ring roof
 Of leaves and trembled blossoms, where there ran
 A brooklet, scarce espied:

(7-12)

詩人は「確かに夢に見たのだが、それとも目覚めてから見たのだろうか、あの翼のあるサイキを？」と思うと言って、森の中をあてもなくさまよい歩いていくと、突然彼は失神するほどに驚く。小川がさらさらと流れている「草深い臥床」(‘deepest grass’) に美しいサイキとキューピッドのはげしい愛の陶酔が

自然美との組み合わせで、このむせかえるような甘美さがかもし出されるのである。

E.C. Pettet はこの語の用法について考察している¹⁾。彼によれば「波うつ草原の臥床」の中に身を沈める詩人や馥郁とにおう草花にかこまれてサイキとキューピッドが寝息も静かに「草深い臥床」の上に横になっているところは、キーツの気に入りの言葉「緑葉の茂る世界」(‘leafy world’) と密接に感覚的な結びつきを思いおこさせるもう一つのキーツらしい感覚の一面であると説明している。

次の書簡詩「ジョージ・フェルトン・マシュウに寄せて」(‘To George Felton Mathew’) にも

Should e'er the fine-eyed maid to me be kind,
Ah! surely it must be whene'er I find
Some flowery spot, sequester'd, wild, romantic,
That often must have seen a poet frantic;

(35-38)

と描写されているように、「どこか草花の咲きみだれるところ」(‘Some flowery spot’) は精神をなぐさめよみがえらせる働きをもつ場所である。それは詩神の宿る所、詩心を刺激し育てる所、世間のわずらわしさから一層隔離された理想郷として表現される。

III

「スペンサーにならって」(‘Imitation of Spenser’) に見られる感覚的で華やかな自然描写は明らかに自らの感情の高まりを、控えるような琥珀色の美で朝をかざりながら、古典的な美の正統の世界に身をおく詩人キーツそのものである。

Now Morning from her orient chamber came,
And her first footsteps touch'd a verdant hill;
Crowning its lawnly crest with amber flame,
Silv'ring the untainted gushes of its rill;
Which, pure from mossy beds, did down distill,

キーツの湿った植物のイメージ（星野）

And after parting beds of simple flowers,
By many streams a little lake did fill,
Which round its marge reflected woven bowers,
And, in its middle space, a sky that never lowers.

(1-9)

朝の光に照らしだされて琥珀色に映え輝く緑の丘に、苔の川底の上を流れ落ちる銀色のせせらぎ、美しく可憐な草花、小さな湖、湖のふちに映える小枝のもつれあう木蔭などが存在して一つの自然界を作りだす。丘の銀色に輝く清らかな湧き水。それは川底に生育する苔を潤して流れ、草花やあらゆる樹木の根を培うのである。

すでに冒頭で挙げた引用文に「私は小さな丘の上に爪さきで立った」(‘I Stood Tip-toe upon a Little Hill’) 自らの詩の源となる新たな想いや感動をもたらしてくれる自然へのキーツの素朴な愛の表現が見い出されるのである。

And let a lush laburnum oversweep them,
And let long grass grow round the roots to keep them
Moist, cool and green; and shade the violets,
That they may bind the moss in leafy nets.

(31-34)

さんざしの花の上に青々としたきんぐさを茂らせよ。そして湿気と涼しさと緑を保つために、その根のまわりに長い青草を茂らせよ。すみれを日蔭にかくし、それが苔を網の目のように茂らせることができるようにと、快よい自然の生命の営みをうたうときキーツは詩人としての喜びを味わうことができたのであり、自然を自らの拠りどころとする詩人の心境を的確に表現しているのである。

すぐ続いて

A filbert hedge with wild briar overtwined,
And clumps of woodbine taking the soft wind
Upon their summer thrones; there too should be
The frequent chequer of a youngling tree,

That with a score of light green brethren shoots

From the quaint mossiness of aged roots:

(35-40)

と描写されているが、これは野ばらにからまれた、はしばみの生垣、夏の玉座にそよ風をうけるすいかずらの茂み、そこにもまた古い木の根の異様な苔から20本ばかりの仲間と一緒に薄緑の芽を出した若木が、濃い緑の森のいたるところに市松模様を描く——最も基本的な自然美の展開である。初期のキーツの特徴ある用語を多く含んでいる詩であるが、この詩句の中に「古い木の根の異様な苔」(‘the quaint mossiness of aged roots’) が目にとまる。E.C. Pettetはこの詩句の用法について考察している²⁾。彼によれば、これは「絵を見るような生々した描写である」と指摘しているが、更にこの詩句の用法の背景について、この当時の画家は苔の不思議な且つ微細な美しさへの広く行きわたった浪漫的な趣味を「画趣に富むもの」の素材として描いていたようである。キーツは恐らくこの当時の植物学者の本の挿し絵などから目にふれたのであろう、と説明を付けくわえている。

次の「エンディミオン」(‘Endymion’) では、色々な驚くべき事柄を体験したあげくの果て、エンディミオンはそけいの亭にくる。露じめる豊かな草花が彼の目の前にある。美しい草花は彼の気持よい溜息を感じて、それをかすかにゆり動かす。甘い夢をみる力をあたえられたように感じて、彼は緑の岩屋と薄暗い路を曲り曲って、まどろむ場所を探索すると「いとも滑らかで、いとも奥深い苔の寝床」(‘the smoothest mossy bed and deepest’) (II, 710) を見出す。この苔の寝床で彼は未知の月の女神をいだけ夢を見るのだが、この甘い夢を見る力を彼にあたえもたらしたのは「ネオ・プラトニックな幻影よりもむしろ狂喜した夢である」と C.L. Finney は指摘している³⁾。

次に挙げる「空想」(‘Fancy’) の詩は、さんざしの木には斑模様の卵がかえり、めんどりが翼で静かに雛をだきかかえている。そこは「苔の生えた巣」(‘her moss nest’) (62) の中なのである。さんざしの木に囲まれて、閉ざされたところでの苔の生えた巣は雛を大事にだきかかえている親鳥にとっては安らぎの場所であり、周囲のわずらわしさから隔離された理想郷なのであろう。

「秋に寄せるうた」(‘To Autumn’) では第1連の冒頭から秋は「霧深く果実が豊かに実る季節よ、恵みあふれる太陽の親しい心の友よ」と擬人化して呼びかけられる。

Conspiring with him how to load and bless

With fruit the vines that round the thatch-eves run;

To bend with apples the moss'd cottage-trees,

And fill all fruit with ripeness to the core;

(I , 3-6)

「共同ではかりごとをたくらむ」太陽と秋の一体となった親近感をあたえる言葉を最初におき、それが第1連の円熟にいたる過程を表わす動詞 (load, bless, blend) を支配する。

上の引用文の3行目は美しく凝縮された用法で「田舎屋の苔むす庭樹」(‘the moss'd cottage-trees’) の枝もたわわりにりんごをつけるのである。E.C. Pettetはこの詩句の技巧を賞賛して、‘drooping’、‘bending’、‘bowing’、‘slanting’はキーツの好きな用語であると述べている⁴⁾。‘to bend’という巧妙な用語によって田舎屋の苔むす庭木の古い枝もたわわに実る果実の重味と豊饒さとがうまく表わされている。

次の「エマ」(‘To Emma’) の詩では、女性の心をよびおこす心の動きを表わすのに「おお、来たれ、わが愛しのエマよ！」と呼びかけて詩人キーツの甘美な言葉が登場する。

The riches of Flora are lavishly strown,

The air is all softness, and crystal the streams,

The West is resplendently clothed in beams.

惜しみなくまき散らされた花神フローラの花、爽やかに澄みわたる大気、清らに流れる川、あかね色した光の衣をまとう西空は感覚的で華やかな情景を作り出す。更に森の中の原っぱに妖精たちが集い来て、夕べの讃歌を歌いあげる。そして落日の光に照らされて、軽やかに仙女が舞うという。このような美しい自然の風景の中で女性と出会い、そこに埋没するキーツの心は

And when thou art weary I'll find thee a bed,

Of mosses and flowers to pillow thy head:
There, beauteous Emma, I'll sit at thy feet,
While my story of love I enraptur'd repeat.

(9-12)

と描かれているように、この自然美と女性の組み合わせがかもしだす甘美さはキーツの気に入りの言葉「苔のむしろと、むれ咲く花のしとね」(‘a bed, / Of mosses and flowers’) で表わされる。このむせかえるような苔とむれ咲く花の臥床は恋人たちの安らぎの場所であり、楽しく愛の言葉を交わす所として実にキーツらしいイメージである。

IV

「小夜鳴鳥に寄せるオード」(‘Ode to a Nightingale’) において、詩人キーツの心の動きはきわめて直接的に提示される。

第IV連では「小暗い森」(‘The forest dim’)⁵⁾ ——理想世界への没入を、酒神バッカスの豹のひく車でなく「詩歌の見えざる翼」(‘the viewless wings of Poesy’) (3) に乗って実現しようとする。これまでは、詩人はまだ理想への飛翔段階にあり、理想との合一にはいっていない。それが第5行目では「もうお前とともにあり！」(‘Already with thee!’) (5) と、これまでの人間の世界と異なった世界にはいっている言葉で表わされる。事実上、この点で詩人は意識が微妙にも曖昧になり、ナイチンゲールは生命ある鳥ではなく、想像上の鳥となって、理想の世界が形成される。「折しも月姫は玉座にのぼり、星の精たちが月姫の周りを取り囲んだ」(‘And haply the Queen-Moon is on her throne, / Cluster'd around by all her starry Fays;’) (6-7)。これはまさに妖精の世界である。この理想世界には視覚的イメージがない。光はあっても、それは夜の森の緑蔭と曲がりくねった苔路を通して吹き運ばれてくる天の月と星の光にすぎない。

第V連は感覚美に満ちた理想世界である。「足もとにどんな花が咲いているのか、どんな香りが木の枝に漂っているのかもわからない」という、実に「香ぐはしき暗闇」(‘embalmed darkness’) (3) なのである。匂う暗闇の中には緑の葉かげ、曲りくねった苔路、白さんざし、露にぬれたばら、すみれの花な

どの牧歌的自然美が列挙される。これらの暗示された植物は存在するが現実の植物はない。夜の闇の中にほのかに香る花園は、E.C. Pettet によれば⁹⁾「聖アグネス祭前夜」(‘The Eve of St. Agnes’) の詩に「三つのアーチが並んだ高い窓が一つあった。その窓は果実や花や柳の束などの浮き彫りで縁がきれいに飾られてあり…」(‘A casement high and triple-arch’d there was, / All garland-ed with carven imag’ries / Of fruits, and flowers, …’) (X XIV, 1-3) と描かれているように、中世の濃密な装飾様式と同じく、詩の幻想の中に存在する幻の花園なのである。暗闇の中なので植物の姿や色こそは見えないが香り豊かに咲きみだれているのである。そして幻の花園であるが、緑の葉蔭といい、苔の生えた路、馥郁とにおう草花などは現実の植物のごとく、実に想像力豊かな情景として描写されている。

次の「ハイピェリオンの没落」(‘The Fall of Hyperion’) のはじめの一節では更に重要な役割を果たしている。この物語風劇詩の語り手であり、そして主人公である詩人の登場で、詩人の夢が19行目からはじまる。

Methought I stood where trees of every clime,
 Palm, myrtle, oak, and sycamore, and beech,
 With plantain, and spice-blossoms, made a screen;
 In neighbourhood of fountains (by the noise
 Soft-showering in my ears), and, (by the touch
 Of scent,) not far from roses. Turning round
 I saw an arbour with a drooping roof
 Of trellis vines, and bells, and larger blooms,
 Like floral censers, swinging light in air;
 Before its wreathed doorway, on a mound
 Of moss, was spread a feast of summer fruits,
 Which, nearer seen, seem’d refuse of a meal
 By angel tasted or our Mother Eve;

(19-31)

この詩に描かれているように「〈立って〉いたように思う」(‘methought’) と

いう表現でわかるように、主人公はすでに夢の世界に入っているのだ。夢の中であらゆる風土の樹木が育ち、泉の音が聞こえ、露じめる美しいばらの芳香が漂っている。更にこの庭園には「サイキに寄せるうた」（‘Ode to Psyche’）を思わせるような「あずまや」（‘arbour’）のある庭園が見られる。「サイキに寄せるうた」の園に描写されている「花咲き匂うばらの至聖所」（‘A rosy sanctuary’）（59）には名もない「花の蕾や釣鐘形や星の形に咲く、それも多くの花を育てながら決して同じ花を育てるようなことのない空想という庭師の作るすべての花」（61-63）が咲きみだれている。「サイキに寄せるうた」にも、このように語り手の詩人が夢幻状態で物語っているのである。

この「ハイピアリオンの没落」（‘The Fall of Hyperion’）の庭園は「サイキに寄せるうた」（‘Ode to Psyche’）で空想のそだてた庭園と同じく、空想の描く美しい夢の庭園なのである。それが次第に消滅する運命であるのは、この庭園の「あずまや」（‘arbour’）の「花環でかざられた入口の前の苔の生えた築山の上」（‘Before its wreathed doorway, on a mound / Of moss’）（28-29）に「天使かイヴ」（‘angel…or our Mother Eve’）（31）の食べのこしたご馳走がならんでいることから判明できよう。勿論このご馳走は詩人を大いに魅惑するのだが、この庭園の「苔の生えた築山の上の夏の果物のご馳走」は、その反対の極の暗い意識の世界の出現をほのめかすのである。

C.L. Finney は、キーツ自身レノルズに宛てた手紙（1818年5月3日付）の中の有名なキーツの人生を多くの部屋からなる大邸宅にたとえた比喻を例にとりあげて、この夢の導入部にある美しい庭園の描写は〈人生の部屋〉の比喻のなかの「処女思想の部屋」（‘the chamber of Maiden-Thought’）に符合すると言ひ、こうした庭園の華やかさ、明るさの反面、かくされた闇の中で、人間の心と本性をみぬく洞察力を身につけた詩人は、この庭園のうしろにある暗黒の通路に通じている世界に気づきはじめる。それ故に庭園に食べのこしたご馳走は「処女思想の部屋」と一致すると説明している⁷⁾。

この美しい花園をおもわせるような庭園には馥郁と香るばらの花、夏の果実の感覚美の世界から、きびしい現実の世界、苦悩の人生体験をとおして人間や物の本性を見ぬく思索と洞察力の世界へと詩人は導かれていく。食べのこされ

た様々な夏の果物がおかれている苔の生えた築山と言ひ、眩惑的な露じめる草花の色や香は実に芳醇無比とおもわれる夢の庭園なのである。このように詩人の夢の中に存在する幻の庭園ではあるが、あたかも現実の植物のように妖しく咲きみだれているのである。

V

以上をもって詩人キーツが露でぬれた植物をどのようにとらえ、また彼の詩に頻出する苔のイメージがどのようにあらわれているかを述べてきた。既に述べたようにキーツの描く詩的想像の世界では‘water’と‘verdure’とは共に切り離せない特色をもつのである。例えば

Upon the sides of Latmos was outspread
A mighty forest; for the moist earth fed
So plenteously all weed-hidden roots
Into o'er-hanging boughs, and precious fruits.

(*Endymion* I, 63-66)

の詩に見られるように、ラトモスの山腹には広大な樹木が生い茂っている。そこには湿った土壤があらゆる樹木の根を豊かに培って、その枝葉を鬱蒼と茂らせ、貴い果実をみのらせるのである。キーツはすべての植物の根を培う「湿り」(‘moisture’)の用語に異常なほど鋭い感覚をいだいていたのである。このように自然は彼の未熟な感性に深い衝撃をあたえたのだが、自らの詩の源流となる感動をもたらしてくれる、自然への彼の素朴な愛の表現は「私は小さな丘の上に爪さきで立った」(‘I Stood Tip-toe upon a Little Hill’)の詩に見いだされるのである。

For what has made the sage or poet write
But the fair paradise of Nature's light?
In the calm grandeur of a sober line,
We see the waving of the mountain pine;
And when a tale is beautifully staid,
We feel the safety of a hawthorn glade:

(125-130)

「自然の光の美しい楽園のほかに、賢者や詩人に創作意欲を起こさせるものがあるか。」とキーツは言い知れない詩作のよろこびを感じるのであった。自然の圧倒的な美しさに身をまかせるとき、厳粛な詩の一行の静かな荘麗さの中に美しい山の松のうねりが見えてくるのである。そして「美しく落ちついた物語」を読むと、われわれも詩人とともに自然界の魅力に誘われて「さんざしの草の生えた低い湿地にある安らぎを覚える。」のである。

- H.W. Garrod (ed.): *The Poetical Works of John Keats*, O.U.P., 1956
に拠った。
- Dane Lewis Baldwin (ed.): *A Concordance to the Poems of John Keats*, The Carnegie Institution of Washington, 1917を参照した。
- Sidney Colvin: *Letters of John Keats*, Macmillan & Co., 1925. p.107.

筆者注

- 1) E.C. Pettet: *On the Poetry of Keats*, Cambridge U.P. 1957 p.53.
- 2) E.C. Pettet, *op.cit.*, p.58.
- 3) C.L. Finney: *The Evolution of Keats's Poetry* (Russell & Russell, 1963),
I., p.309.
- 4) E.C. Pettet, *op.cit.*, p.66.
- 5) *Ode to a Nightingale*, st. II, 10.
- 6) E.C. Pettet, *op.cit.*, p.60.
- 7) C.L. Finney: *The Evolution of Keats's Poetry* (Russell & Russell, 1963),
II., p.464.